「小池辰雄――その人物と業績――」

──小国町愛蔵書センター設立一周年記念講演──

新潟県刈羽郡小国町　商工物産館

２００４年９月２６日

　奥田昌道

# 【見出し】

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　●

# ●小池先生との決定的な出会い

どうも、皆さん、よくおいでくださいました。小国町愛蔵書センターの関係の方々の暖かいおもてなしをいただきまして、このように素晴らしい所で、私の恩師であります小池辰雄先生のことを語る機会を与えていただきまして、大変感激しております。

皆さまは、小国町の方は既に御存知かどうかわかりませんが、さきほど、武蔵野市の図書交流委員会の副委員長という立場でお話しくださった小池信雄さんは小池辰雄先生のご長男です。今、私を紹介してくださった小池牧子さんはその奥様でいらっしゃいます。そういうプライベートな立場を一切仰らなかったので、そこで私はちょっとその部分を補いたいと思いまして、申し上げている次第です。

小池牧子さんの紹介にはもう参りました。そういう先生のご期待に果たして私が沿っているかどうか。「先生の著作集の全文を暗記するほどに読んでいる」と仰られて、少し困ります。いや、むずかしいところがありますから。特に『無の神学』という神学の本の中で、日本の人たちとの比較とか、中国の人たちとの比較なんかが出てくるんですね、キリストとの比較で。老子をとりあげて――老子は「無、無道」ということを言った方ですから――その老子の無とキリストにおける無というのを書いておられるところは、私は漢文があまりできないものですから、少し敬して遠ざけてまいりました。だから、これから家に帰りましたら、もう一度勉強をやり直さなければなりません。

ご紹介いただきましたように、私と小池辰雄先生との出会いというのは１９５９年でありました。その時の年齢ということまで考えなかったんですけれども、今のご紹介を聞いて、先生が５５歳、私が２７歳。ちょうど半分ですね。ちょうど半分のところで出会ったというのも非常に不思議な気がいたします。つまり、先生からいえば、私は息子のようなものですね。２８という年齢差があります。

それが私にとっては決定的な出会いでありました。その出会いがなければ、また私の歩んだ人生も変わっていたかもしれないというような出会いでありました。と申しますのは、私は１９５６年に、人生の悩みから必死に救いを求めて、ちょうど大学の友人というか、同じ研究を志していた者が非常な熱心なクリスチャンであったので、その時に初めてキリストの話をその方から聞いた。私はその頃は悩んで、藁にもすがる思いで、キリストを信じますと言って、キリストにすがった。そして、一つの道が開けたんですけれども。

その時に通いました教会が北欧系の宣教師の教会だった。私にしたら、救われたのはありがたいけれども、息がつまりそうでした。北欧の方々は善意なる方々ですが、日本に対する理解が乏しい。日本の仏教とか、神道とか、日本の宗教、文化に対してほとんど理解がない。

「キリスト教でなければダメですよ。キリスト教以外のものに目を向けるのは不信仰ですよ。そんなものではダメです」

という、凝り固まったオーソドックスな信仰ですね。ひょっとしたら、ブッシュさんもそうかもしれないけれども。ファンダメンタリズムというんですけれども、そういうキリスト教を信奉しているところでしたので、私は窒息しそうだった。その時に、小池先生という方に出会った。

先生はドイツ文学者で、東京大学教養学部のドイツ語の先生ですけれども、単なるドイツ語の先生でなくて、非常にキリスト教の方に対する理解が、造詣が深いんです。ドイツ語も、聖書とかルターの書物とか、そういったものを通してドイツ語を教える。教室がまるでキリスト教のお話をしているような、そういう方だったんですね。

その方が、５９年の１１月初旬にドイツ文学会が京都大学で開かれたときに、ドイツ文学会においでになって、その機会に――私は京都大学で「聖書を読む会」をやっていまして、聖書研究会と言ってましたけれども――会の主催で先生をお招きして大学の会館で講演会を開いた。一般の方とか学生が１５０人くらい集まりました。私はその司会をさせていただいた。その時の先生のお話があまりにも素晴らしくて、私は正直、そこで目が開かれた。「これが本ものだ」と思ったんですよ。だから、それ以来、その道をまっしぐらに来ました。

ということで、「決定的な出会い」とは、そういうことでした。私は学者のはしくれで、しかも、法律学、民法という勉強に志して、１９５５年に大学を卒業し、その頃は助教授という身分でした。

法律学というのはこの世の俗世間のことを対象にしている学問です。本当にドロドロとした人間の、ある意味では、どうしようもない救いがたい人間を相手にしながら、いかにすれば、世の中が円満におさまるかということを考えているわけですね。刑法は、処罰というものがありますから、違います。民法というのは、人と人との関係です。そういう人と人との関係で、財産の問題とか、離婚の問題、親子の問題、そういった問題を扱うわけですが、そこでの人間を対象とした学問です。その中に法則をもちこんでくる。そこからまた法が生まれるという、そういう世界なんです。要するに、俗世界、俗界なんです。

キリスト教の世界は神さまの世界ですから、聖なる世界でしょ。我々の本来なら踏み入ってはいけないような神聖なる世界なんですね。宣教師とか、神父さんとか、牧師さんとかいう方は、そういう神聖なる世界に仕える立場だから、己も神聖でなければいけないし、人にも神聖なことを説く。そうしますと、非常なギャップがある。そして、我々俗人の心というのがなかなかわかっていただけないと、ひがんでおりました。

だから、「すべし、すべからず」なんです。私の接した宣教師さんは、非常に聖潔と申しますか、女性の宣教師もいらっしゃたけれども、その方なんかも１５歳でその道に入って、俗世間とは関わりがなくて、

「映画もダンスも何も、そんなものは私には必要がありません」

なんて言って、涼しい顔をしているような人ですからね。住んでいる世界がちがうと思った。男性の宣教師にしても、

「こういうのはどうですか、ああいうのはどうですか」

と聞くと、

「それはダメです、それはダメです」

と。「ダメです」という答しか反ってこないんです。

たとえば、お葬式がありますね。誰でもがお焼香をなさいます。写真の前にして手を合わせて拝む。

「それはいけない。偶像を拝んではならないと書いてあるから」

「写真ではないですか？」

「いや。そういうものを拝んでいると、ノンクリスチャンの方が、それを見ている時に偶像を拝んでいると誤解するから、それはいけない。家庭の中のお仏壇はつぶしなさい。そんなものは実体のないものです。キリストの神だけが神だから、およそ形あるものは全部否定しなさい」

と。そういう調子ですからね、家庭生活も何も成り立たないでしょ。その時に、小池先生に出会ったんです。

# ●根っこの世界が大事だよ

いや、先生は実に自由自在でした。その話を淳々とお話したいんです。こんな方がいらっしゃるのか。しかも、学問の道と信仰の道をみごとに両立させて、一つに溶け込んでいる。これは素晴らしいと。

それから、私は思ったんです。先生はキリスト教とか、聖書を、それを学問的に専門にやっておられる。ドイツ語とはいいながら、やっている材料はそういったものばかりだ。だから、信仰という世界と学問の世界が一致しやすいのだな。それに引き換え、我が身はまだと。それで、先生に、

「いや、悩んでいるんですよ。私はどうしたらいいですか」

とご相談した。キリスト教でないときには、学者の道を我が道と思ってきたわけです。ところが、キリスト教になったら、今までのものは全部、いったん否定しないといけません。白紙にもどらないといけない。白紙にもどったときに、一体私は学問を続けていっていいのかどうか、これからどうしたらいいのか。「本当にキリストに熱中するなら、職業を捨てて、神学校へ入りなさい」と、宣教師からはこういう答しか返ってこないんですね。みんなが伝道者になれと。さぁ、困ったなと。御声も聞いてない人間が、そんな勝手なことをしていいのだろうかと思っておりました。それで、小池先生にご相談した。

そしたら、

「奥田君、心配はいらないよ」

と言ってくださった。講演の中でも仰ってくださったんですけれども、樹木の絵をお書きになった。

「樹木を見てごらん。根っこがあるだろう。人は地上に見えているところばかり見ている。見えている世界は、太い幹があり、太い枝があり、細い枝があり、葉があり、花が咲く。そういう見えている世界は文化・文明の世界である。しかし、この文化文明というものが本当に健やかに――つまり、別の言葉でいうと、社会を幸せにする、人を幸せにする――そういう本当に健全な社会を形作るような文化文明であるためには、根っこというのが大事なんだ。根っこというのは見えないだろう」

と。木を見たとき、「あぁ、立派な木だな。三百年、五百年、千年もたっている。凄いなぁ」と言って、みな驚きますね。ところが、根っこがどういう姿であるか。おそらく、枝を大きく張っている木は根っこも大きく張っているはずです。そうでないともたないですね。だから、

「根っこの世界が大事なんだ。これが正に、神さまと交わる世界、仏さまと交わる世界。そういう見えない世界、魂の世界だ。人間はみんな、魂をもった存在だ。単なる肉体的な物質的な存在ではない。魂をもった存在は、魂の根源であるお方と交わり、そこから栄養分を吸い上げていないと、人間としても枯れてしまう。文化文明というものが人間の営みである以上は、やはり、営む人自身が深く、地中深く根をおろして、そこから本当の養分を吸い上げて、そして、健やかな健全な素晴らしい枝ぶりになり、そして花が咲くんだ。だから、宗教の世界は根っこの世界だ。学問の世界は見えている世界で、伸びていく方向は反対だよ。宗教の世界は地中深く下りていく。学問の世界、文化の世界は上へ上へと伸びていく。方向は反対だけれども、両方は反しない。根っこが地上を支えている。だから、君の学問は、今は両立しないかもしれない。この世のことにかっている学問と、神さまのことに熱中する信仰の世界は、今は相矛盾しているように、二足のわらじのように思うかもしれないけれども、必ずそれは調和する時がくるから、その時を望んで、今は疑わないでやりたまえ」

と言っていただいたんですよ。これは、私はありがたかったですね。

# ●誰もが自己にとらわれている

その頃の私のおりました昭和３０年代から４０年代にかけての学問の世界は、特に京都大学なんてのは非常に左翼の思想が強いところです。

学者も、「社会科学をやる学者はマルクス主義でなければ科学的でない。学問が科学的であるためには、唯物史観、マルクス史観に立たなければならない」と、それを信奉している方々がほとんどなんです。「法律なんていうのは権力者が人民を統制するために抑圧する手段であるにすぎない。そんなものを真剣に勉強して何になる」と言って、くってかかる運動家もまたいましたからね。そういう時ですから、およそ学問でありうるために、マルキストでなければいけないのか、という疑問だってあります。それに対して、そうじゃないと。

「今はわからなくても、学問の道をひたむきに行き、そしてキリストに深くわけ入って行けば必ず答が見つかるから」

と言われた。僕にとってはそれが本当に有りがたかったです。人生の問題でも、キリストにつながる道を本当に幅広く豊かに教えていただいた。切り拓いていただいた。

「『あれをしてはいかん、これをしてはいかん』ではない。本当の世界は自由だ」

と。学問にも関わりますけれども、よく先生はこう仰った。

「世間では、キリスト教を信ずれば視野が狭くなるという――つまり近視眼でそれしか見えない――それは間違いだ。本当にキリストの世界に深く入れば、非常に広やかな自由なものの見方ができるようになる」

と。それはなぜかと言いますと、人間というのは自己にとらわれている。我執、自我と言います。誰でもが自分が大事なんです。「自分、自分、自分」で生きている。さきほど、人間社会というのはドロドロしてどうしようもないと申しました。その実体は何かというと、エゴとエゴのぶつかり合いなんです。

「自分は他より偉くなりたい。自分はあれよりは立派でありたい。そこに自分の存在価値がある。それにひきかえあのような嫁は。私はもっと働いているのに、あの嫁は全然働かない」と。そういうふうに自分を規準にして他を審く。自分が劣っていれば、ひがむ。ねたむ。不平等であると言ってこぼす。すべてそういうことのぶつかり合いで、闘争というものがこの世の中を支配する。これが人間の常なんです。それはもとへ帰れば、自分というものに囚われているからだと。

# ●南無キリスト

キリスト教では、「罪」ということをさかんに言いますね。「原罪」といったり。アダムとイブが罪を犯して、それが遺伝のごとく今まで我々の中にしみこんでいると。何で日本人の我々が、どこか知らないアダムとイブの犯した罪を遺伝的に受け継がねばならないのか、さっぱりわかりませんけれども。キリスト教では「原罪」と言う。「人間は罪びとである。だから救いを要する」と。

キリスト教の方で、牧師さんや宣教師さんの仰る罪とは何かというと、「人間が心にいろいろ汚い思いを抱いたとか、憎しみを抱いたとか、あるいは、具体的な過ちを犯してしまったとか。心の思い、自分の行動、言葉、そういったものにおいて神さまのにそわないことをやっている、その一つ一つが罪だ」と、こういうふうに教わった。だから、本当にまじめなクリスチャンは毎晩懺悔するんですよ。僕なんかにはとてもできない。一日をふりかえって、「神さま、今日は朝から晩までこんな悪いことをいたしました。どうぞお許しください」と。毎晩毎晩あやまるのはもう堪忍してほしいと、私は思いますよね。

ところが、小池先生が仰った「罪」というのはそうじゃないんです。

「自我、自分自身が罪だ」

と仰った。これは、ある意味では、すごくきつい宣言なんですね。自分自身が罪だと。「生まれてきてすみません」という、あの太宰治みたいに。自分自身が罪だと言う。しかし、よく考えたら、そうなんですよ。汚い思いをいだいた。それは自分が抱いた。何か変なことをしでかした。それは自分がやったんです。結局、そのしでかすのは枝葉の話で、根源は何かというと自分自身なんです。

「自分自身がどうしようもない。それに気づきなさい」

と、先生は言ってくれた。自分自身が罪であって、どうしようもないやつだと、それに気づきなさいと。

「どうやったら、救っていただけるのでしょうか」

「キリストが全部、引き受けてくれたから、大丈夫だよ」

と。どんでん返しですね。キリストが全部引き受けてくれた。

お釈迦さまは、大慈大悲ですよね。お釈迦さまが涅槃の境地に入られるときに、みんなのの悩みを全部引き受けて、悟りの世界に入った。だから、お釈迦さんのご本願によって救われる。「衆生く仏性あり」です。衆生悉く、本当に気づけば、救われた存在だよというのが本当の仏教のこころだと思うんです。

小池先生は、キリストの世界では、

「キリストが十字架というあの犠牲において、あの十字架で、まったく罪なき神の子であったキリストが我々人間のを背負ってくれた」

と言われた。私は、「罪」という言葉よりも、「」という方が日本人にはピンとくると思う。そういう人間の業をキリストが十字架で全部引き受けてくれている。

「だから、あなたはもう毎晩、毎晩、懺悔しなくてもよろしい。もう十年分も二十年分も、過去・現在・未来全部、キリストがご自身で引き受けてくれた。それだけを受けとればいいんですよ」

と。「ああ、そうですか。要するに、われがいかんのですね。囚われを捨てようと思っても、捨てられないのが人間の罪なんですね。それが業なんですね。そうですか。それをキリストさまが全部片づけてくださった。これは有難い教えですね」と。

ちょうど、親鸞上人に対して、「あなたは、法然上人のお言葉の通りに、ただ南無阿弥陀仏だけを称えて、それでニコニコなさっているけれども、そんなのウソだったらどうするんですか。ひょっとしたら、ウソかも知れませんよ。南無阿弥陀仏だけを称えて浄土へ往けるなんてウソかもしれない」というようなことを言いだした。そしたら、親鸞さんは、しゃあしゃあと、

「いや、結構だよ。私は他に道がない。どうせ地獄の身である。私は、放っておけば、地獄行きが決められている。己自身がそんな悪いやつだ」

と仰いました。それを「南無阿弥陀仏」と、弥陀の本願にすがる。

「南無」というのは、「祈り入る」ということだそうです。「阿弥陀」というのは「アミッターヤー、アミッターバー」といいまして、「無量寿、無量光」のこと。「仏」は悟りを開いた方、お釈迦さまです。

「素晴らしい光と生命のそのお方の中に帰依していく」

というのが「南無阿弥陀仏」です。だから、「南無阿弥陀仏」というのは素晴らしい言葉なんです。南無阿弥陀仏と心をこめて祈るときに、そのお釈迦さまの中に抱きとられて、自分も仏になっている。そういう深い意味がこめられた言葉なんです。

さっき言葉のことを小池信雄さんが仰いましたけれども、言葉というのは本当に凄い力をもっているんですね。生命を持っている。それを本気で「南無阿弥陀仏」と称えれば、その世界に入るという。

それで、小池先生は、

「南無キリスト」

と仰います。「南無キリスト」と仰る。日蓮さんだったら、「南無妙法蓮華経」でしょ。妙法、素晴らしい法の世界ですね。仏さまの世界は仏法の世界です。その妙法の中に帰依していく。

だから、小池先生が仰る宗教の世界は全然、垣根がない。本ものならば、すべて尊ぶ。

「だから、どうぞ皆さん、本ものになってください。仏教の方は本ものになってください」

と仰る。開いた方々、親鸞さん、法然さん、日蓮さんが、そういったあの鎌倉時代の大変な時代に大変な戦いをして開いた道、生命賭けで開いた道、それが今に伝わっているわけです。だから、

「信者の方々はみんなそこへ帰ってください。そこで本当に南無阿弥陀仏を称え、南無妙法蓮華経を称え、その方々と同じ光の世界に入ってください」

というのが、小池先生の語りなんですね。ご自分は、

「私はキリストに救われた。だから、私は、南無キリストだ」

と仰る。それで、私は小池先生の流れですから、「南無キリスト」なんですね。

# ●鐘は上からぶら下げられている

さっきの学問の話に戻りますと、要するに、学問をするのに己が立ったらダメなんです。学問をするということは、真理を真理としてそのまますなおに受けとる。色がついたらダメなんです。色眼鏡でものを見たら、見えないんです。無色透明の光で見る。それを小池先生は、

「太陽の光を見よ。太陽の光は無色である。無色の太陽の光が水滴に当たると、七色の虹になる。水滴も無色、太陽の光も無色。無色の水滴と太陽の光が交差すると、あの七色の不思議な虹が現れる」

と言われる。あの大海原も青々としてますけれども、あれは無色なんですね。太陽の光の具合によって、あのようなまっ青な海が現れたり、まっ青な空が現れたりする。だから、小池先生は、その無色、色のつかない本当の――天然色とはそのことです――天然の光が素晴らしいと言われた。その天然の光でものを見る。それを我々に即して言いますと、自分というものの主観、己から解き放たれたその光でものを見る。歪みなくものを見る。

だから、先生は、あるとき自分の雅号を「天鐘」と呼ばれた。天の釣鐘です。その意は何かといいますと、西洋の鐘は、教会堂の鐘は中にベルがあってガランガランガランと鳴ります。東洋の鐘は、ゴ～～ンと余韻を残して鳴ります。

「鐘を見てごらん。足場も何もないだろう。もし、鐘が何かで支えられていたら、打ってもコツンというだけで鳴らない。天のあの釣鐘は中が空っぽだ。天空に抱かれ、天空を宿し、そして、撞木で突けば、妙なる響きを発する。鐘が鳴るのか、空気が鳴るのかわからないが、それが本当の姿だ。鐘は上からぶら下げられている。自分の足場、立場をもたない」

と。上からぶら下げられている。これが天です。先生にしたらキリストになるし、仏教だったらお釈迦さまになります。そういう、自分をこえた大いなるもの、自分をこえた大なる素晴らしい根源なるお方、そのお方に首ねっこをつかまれて、上からぶら下げられて、

「はい、全部、明け渡します。私は何の抵抗もいたしません。私はからっぽでございます」

と言ったときに、初めて素晴らしい音色が出てくる。これだということに気づかれたんですね、除夜の鐘を聞きながら。それ以来、もうすっかりそれが気に入って、「天鐘」としばらく自分の雅号を名乗っておられました。

そのように、先生がものを見る見方というのは非常に広やかなんです。仏教の世界にも非常に詳しいし、大自然に対しても本当に先生は詩人の心で自然を見ておられます。太陽の光を見たら、そういうことですしね。ですから、非常に色がない。別な言葉で言いますと、宗教臭くないんです。キリスト教臭くない。「それが本当だよ」と言われる。

# ●鳥を見れば鳥となる

先生は非常に子どもを愛されました。童心を。

「ヨーロッパ旅行なんかすると、どの国の子どもも本当に子どもは可愛い、子どもには国境がない」

と仰った。イエスさまも非常に子どもを大事にされた。先生自身も、晩年最後まで童心を失わなかった方ですね。幼な子の中に何か非常に光を見るというか、神さまの光を見るという、そういう思いで幼な子を見ておられた。

もちろん、子育てをなさる若いお母さん方はそうは言ってられません。ギャンギャン泣かれたら、それはもうお母さんとしたら、たまらんでしょう。それは別な話ですけれども。でも、本当に子どもは、にこやかに無心に笑っている姿、戯れている姿、走っている姿、それはどれひとつとっても本当に自然であって美しい。大人はそれを失ってしまった。思い煩いがあるからです。子どもは思い煩いがない。大人は思い煩いがあって、無心になれない。だから、どうすれば無心になれるかといって、またいろいろ修養をつんだりするわけです。

自分というものをはずれて、自分の主観とか、自分がこれをやってやろうとか、野心だとか、そんなものが何もない。ちょうど、山がある。山が素晴らしいから、そこへ引きつけられて登る。山があるから登るんだというように。花が素晴らしいから私は花に魅せられて花と一つになるんだという、先生の芸術はそういうものだった。詩であろうと、何であろうと。芸術の世界では、対象と一体化してしまう。

「雲を見れば雲となり、花を見れば花となり、鳥を見れば鳥となる。そういう境地で、鳥が飛んでいるときに、自分も飛んでいる思いで見ている」

と。そういうことをよく言われた。だから、

「自分はもし、今度生まれてくるなら何になりたいかと問われたら、鳥になりたい」

と言われた。私はやはり人間がいいと思いますけれども、先生は鳥になりたいと。非常にロマンチックなところがあるわけです。それから、虹が大好きでしたね。若いときに赤蔵で療養しておられたときに、素晴らしい虹が出たそうです。その虹が、晩年になっても、九十歳になっても忘れられないと言っておられました。そういう方だったんです。

# ●蔵書は先生の分身です

そういうことで、私と先生との出会いというのはそういうところから始まって、１９５９年から先生が向こうの世界へ往かれる１９９６年まで、ずっと先生とつながっておりました。先生が亡くなられてから今年で８年になります。

先生のお生まれというのは１９０４年です。今年が２００４年ですから、非常に不思議なことに、今年は生誕百年という非常に記念すべき年に当たります。奇しくも――先生が天国へ行かれたのが１９９６年の８月２９日でした――その昨年の８月２９日にこの小国町愛蔵書センターというのがオープンした。これも不思議なことでございます。そして、今年が一周年記念のこの講演会が企画されまして、それが生誕百年に当たるということです。

先生は、さっきから申しましたように、非常に自然を愛しておられた方です。野尻の近くに大学村というのがありまして、そこに別荘をお持ちであった。夏はいつもそこで仕事をしておられました。奥さまとご一緒に行かれて。野尻で自然に親しんでおられた。

「もう東京の街の中は嫌だよ、嫌だよ」

としょっちゅう言っておられました。武蔵野も昔は素晴らしい田園地帯だったんでしょうけれども、拓けてしまってから今は昔の面影はない。

野尻の山を愛しておられたんですけれども、その先生がこの小国町愛蔵書センターという所に先生の分身ともいえるような蔵書が保存されるというのは、これはまた素晴らしいことだなぁと思う。私ども弟子としましては、先生のせっかく持っておられる本をどうしたらよいのか。誰も個人では引き取ることができません。寄付するといっても、どこも引き取ってくれない。そういう時代なんですね。非常に悩んでおりましたときに、こういった形で愛蔵書センターというものができ、そこへ武蔵野市から移管していただいいて、そこでずっと保存していただける。皆さまのご利用の便に供していただけるということを、一番喜んでいるのは小池先生ご自身だろうと思います。

先生という方は――私はある面では腹がたつことがあるんです――お礼や何かでお金をさしあげても、全部本に化けるんです。本に化けてしまうんです。そんなに読めないではないですかと言っても、

「いやいや、持っていることに価値がある」

なんて仰る。それは奥さまの立場からしたら、たまりませんよ。奥さまからしたら、「必要なものだけはいくらでも買いなさい。読みもしないものは無駄ですよ」というのが主婦の論理でしょ。私の家内であれば、しょっちゅう言いますよ。第一に収納場所がない。重くてしょうがない。日本家屋では潰れてしまいますよ、本の重さで。私なんか、しゅょっちゅう無駄なものは買うなと言われておるんですけれども、小池先生はお金が手に入ればもう本に化ける、というお方でした。

だから、愛蔵書センターで保管していただいた本以外にかなりの本がどこかへ分散したはずです。もっと早くからこのことがわかっていれば、もっともっと貴重書も保存していただけたと思うんですけれども。

それから、何を隠そう、私も凄い宝物をいただいているんですよ。これはもう公開していいでしょうか、信雄さん。ルッター聖書です。１７００年代に出版されたそれを小池先生が西荻窪の待晨堂という本屋で発見されて、相当高額だったと思うんですけれども、それを手に入れられた。ぶ厚いルッター聖書という、重い重い大きな本です。

それを小池信雄さんが、「いや、この聖書はやはり奥田先生に受け継いでいただくのが一番父が喜ぶのではないか」と言って、私に下さったんです。私は大事に大事に保管してある。それは旧約聖書から新約聖書までのルッター訳の聖書で、そこへルッター自身が注釈を加えている。そして、ルッターの祈りというのが必ず一章ごとについている。だから、私はもう少し自由な人間になったら、まずその本を読むのに没頭したい。十年いただきたいと思う。でないと申し訳ない。私の用が終わったら、小国町に預かっていただきましょうか。そういう貴重本を私はいただいております。ですから、不思議なご縁でございますけれども。

# ●精神一到何事か成らざらん

今日は、「小池辰雄──その人物と業績──」というタイトルのお話でございます。小池先生の生い立ち人となりは、今かなり申し上げました。それから、教育者としての小池先生、学者としての小池先生、詩人としての小池先生、それから宗教家――宗教人ですね――キリストの僕として小池先生。そういったポイントをお話したいなと思っております。

まず、先生のざっとした生い立ちのようなものですけれども、これは今日皆さんがお手になさったこのリーフレットにもごく簡単に書かれております。一番最後の頁に、

「小池辰雄。１９０４年２月７日、東京に生まれる」

と。そして、お亡くなりになったのが、

「１９９６年８月２９日、往生」

と書いてある。この「往生」という言葉は先生は、

「私が天に召された時に、あなた方は『小池は死んだ』とは絶対に言わないでほしい。次の世界に生まれ変わって生きるんだから。往生するんだ。肉体の小池は消えても、霊界の小池は生き続けるんだから、別な世界に、高次な次元の世界に自分は入っていくだけだから、死んだなんて絶対に言わないでくれ」

というふうに口をすっぱくして仰っていました。私は、先生を納棺して火葬場で最後に火の中へ送ります時に、「万歳！」と唱えたんですよ。もう思わず、「先生、ばんざーい！」と。お家から出棺される時もそうでした。そうなんです。見事に役割を果たして凱旋されたという、そんな気持だったから、「ばんざーい！」と叫んだ。それを先生は喜ばれると思いました。そういった９２歳のご生涯をたどられたわけですね。

愛蔵書センター１階の展示室に、こういう黄色いパンフレットが置いてありました。今度、そこを訪れられたときに、是非これをお手になさっていただきたいと思います。ここにもう少し詳しく小池辰雄先生のことが紹介されています。それを若干、借用いたしますと、

「小池辰雄は１９０４年２月７日、東京本郷弥生ケ丘（弓町。現在の文京区本郷一、二丁目）に父小池政吉、母光子の四男として生まれた。五歳のとき父親を病気で亡くし、ほとんど母によって育てられた。辰雄は泣き虫弱虫の〝ずくなき〟子であった。」

と。お父さまは新潟の佐渡のご出身なんです。だから、新潟県に縁のあるお方なんです。佐渡のご出身で、鉱山技師をなさっておりました。もっと長生きなさったら、素晴らしいお仕事をされたと思いますけれども、若くして、先生の５歳のときに――長男の政美兄さんが１３歳です――そのときに天にのぼってしまわれたということで、先生にとってはお父さまの記憶というのは非常に薄いそうです。それだけに、お母さまに大変世話になっておられる。それから、長兄の政美さんが８歳上ということで、父親代わりに先生の面倒をみておられた。とても親孝行な素晴らしいお兄さんだったということです。

「兄政美と母光子、この二人は終生、自分の恩人である」

と言われた。ところが、そのお兄さんはわずか２６歳１ヶ月で亡くなられる。そういった非常に、先生の若き日というのは苦難に満ちておりました。パンフレットにもどりますと、

「母光子は女学校──のちのお茶の水女子大学になりますが──の教員をしながら苦労して五人の子供を育てた。『精神一到何事か成らざらん』の言葉をモットーとするような一面厳しい母であった。」

この言葉は私も子どもの頃、よく聞かされました。「精神一到何事か成らざらん」と。英語だったら、"Where there is a will, there is a way."「意志あるところに道あり」という。つまり、不撓不屈。それを母さんは貫いたお方だったようです。

「光子は１７歳のとき、江戸に出て勉学をしたいという志を親に打ち明けたが、その望みがかなわぬと知ると、ある夜、夜陰に乗じて出奔した。故郷の信州松代を出て小諸まで来たとき、家から二人力の人力車で追ってきた使いに、『どうしても帰れというなら、私の首を持って帰ってください』と言い放った。」

と。１７歳の少女が追手に対して、「私の首をささっと持って帰りなさい。私はてこでも動きません」と、座り込んでしまったというんですね。「そんなに学問したいのか、そんなに勉強したいのか。わかったよ。私が謝ってあげるから、行ってらっしゃい」と言って、追手の方が逆に路銀を与えて励ましたという、そういうエピソードがある。これは先生がお母さまから何度かじきじきにお聞きになったということで、私もそのお話をよく聞きました。

# ●兄貴の分も戦わなければ

それから、お兄さんの政美さんという方は、これはまた優秀な方だったようですね。一高東大の法学部をトップクラスで卒業なさったそうです。そして、大蔵省に入って、財務官補、書記官として北京の日本公使館に赴任される。出向です。そこで不幸なことがあったわけです。この兄さんに大変影響を受けておられます。

「一番上の兄政美は頼もしい兄だった。兄は身体強健、学力優等で、一高東大で特に英語がよくできた──英語の代名詞みたいなものだったという──。８歳年下の辰雄の面倒を何かとみてくれた。辰雄は中学生のとき、病気で学校を休んだ際、兄から英語を教えてもらい、そのおかげで英語の実力がクラスで一番になるほどだった。」

この兄さんが内村鑑三の影響を受けて、キリスト教に入信されたんです。その時に、兄さんが師事しておられた先生は藤井武という、内村鑑三の一番弟子のお方だった。そのお方の所へ行っておられた。やがて、その影響で、小池先生も藤井武先生を自分の恩師と呼ぶようになる。

このキリスト教に入信してから、また一段とお兄さんの態度が素晴らしく変わったという。つまり、お母さんに対しては孝行そのもの。兄弟の面倒をよく見るという、そういう方だったようです。そして毎晩、９時になると、欄干にもたれかかって窓辺でお祈りをなさっていた。毎日、聖書の頁が変わっていく。けれども、弟の辰雄少年は、

「何だ、教なんか。俺は絶対いやだよ」

と、そういう生意気な態度なんですね。でも、兄さんは一言も「お前はキリストを信ぜよ」とか、そういうことを仰らなかった。ただその態度を見ているだけで、兄さんというのは素晴らしい人だということはわかったというんです。そして、お兄さんが亡くなってから、弟は目が醒めるわけです。そういう関わりでございます。

その兄さんが北京に赴任して、１９２０年１１月に東京を旅立って、北京に赴任し、翌年の９月に悪性腸チフスで仆れる。一年に満たない間でこの世を去ってしまう。北京滞在が一年足らずだったという。だから、非常に先生は、

「兄さんは北京へ行くべきではなかった。本来はロンドンに赴任することに決まっていたのに、内部の事情で、上役の差し替えで北京にまわされてしまった。それが運のつきだった」

と言って、最後まで先生はそのことを悔やんでおられました。

「私は兄貴の分も戦わなければならない。無念に仆れた、多分もっともっと生きて働きたかったであろう兄貴に代わって、自分は弔い合戦をするんだ」

と、常々言っておられました。

しかも、お兄さんが北京で重い病気になったというので、お母さんと次男の龍二さんという兄さんが病院へ駆けつけるんです。もうそのときは危篤状態です。そして、お母さんに

「白衣のキリストさまが迎えにこられました。お先に参ります。おゆるしください」

と言って、三日後に亡くなられたという。もはや、兄さん自身は怨んでいないと私は思うんですよ。キリストが迎えにいらっしゃったんだから。怨んでないけれども、残された弟辰雄にしたら、たまらんわけです。しかも、お母さんは過労と心痛のために帰りの船の中で――今だったら、飛行機で飛んで帰れますけれども、あの頃は船です――あの黄海の船の中で失明してしまわれた。東京駅にお迎えに行かれたら、お兄さんは遺骨となって白い箱の中に抱かれて、失明のお母さんは手を引かれて帰ってくる。それを東京駅で迎えたときの先生は胸が詰まるというか、本当にもう天地晦冥でまっくらです。

それはそうですよね。お母さんは失明なっさて、もうあとは働けない。お兄さんは一家の大黒柱だったのに仆れてしまった。これから誰のお世話になっていくかという、まずその問題があります。それで家をたたんで、叔父さんの家に世話になるという状況になります。

# ●内村鑑三の大集会に出席

先生は第一高等学校（一高）にあこがれていた。兄さんが一高へ行っていたし。ところが、叔父さんに世話になっている身だから、一高を受験して失敗したらいかんからと、水戸高校を受験する。立派な学校だと思います、私からみたら。そこへ入られた。あの頃は全国共通試験で、その順位によって自分の好きなところへ行けるそうなんです。自分は三番だったので一高へ十分入れたのに、水戸高校へ行った。だから、悔しく悔しくて、結局、病気になってしまった。悔しいから病気になったのではなくて、自分の気がのらない水戸で、東京から離れたところで生活する、行ったり来りする、そんなこともあってでしょうか、非常に重い病気に罹って、結局、一年休学してしまう。

その休学中に、お兄さんの残した本棚から本を取った。それが内村鑑三の『宗教と現世』という本だった。その中に、

「宗教は人生の最大の関心事である」

という言葉が出てきて、非常に共感したという。内村鑑三のハートと小池辰雄のハートがそこで響きあったんですね。そして、健康をとり戻すと今度は、内村鑑三の――あの頃は東京大手町の大日本私立衛生会講堂というところで、内村先生はたくさんの５百人あるいはもっと多くの聴衆を前にして聖書講義を日曜毎にしておられた――集会に出かけた。これが１９２３年です。お兄さんが亡くなったのが２１年でしょ。そして２２年に水戸高校へ入った。

「辰雄は１９２２年４月、旧制水戸高校に入学する。その年の初夏、急性腸カタルで入院し、死生の間をさまよう。１ヶ月後、退院する。１年休学。秋、兄の書架から内村鑑三著『宗教と現世』を取って読み、特に「青年に告ぐ」の一文にとらえられ感激する。新約聖書に初めてくらいつく。これが入信の端緒となる。翌２３年２月、内村鑑三の丸の内大手町の大集会へ初めて参会する。」

その時の講演では、「山上の垂訓」の第一句、

「なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものである」

の垂れ紙が掛けられていたそうです。それが非常に不思議な出会いであったという。

先生はのちに読売新聞に、「信仰の旅路」という随想を書かれたことがあります。宗教欄に３回連載された（１９６６年７月１０、１７、２４日）。その一番始めに「内村鑑三と私」という見出しがありまして、そのときのことが書いてある。

「体力がやや回復したので、１９２３年２月２５日、丸ノ内大手町なる大日本私立衛生会講堂で開かれている内村先生の聖書講義をききにいった。その日の印象が妙に焼きつけられてある。私は中央に近いあたりの席についたが、会場には続々と来会者が集まってくる。やがて階上まで満堂となるには驚いた。壇上には大きなはり紙が二枚たれさがっていて、それには山上の垂訓のはじめの二句が墨書してあった。

「なり、心貧しき者は、天国は其人の有なれば也」

「福なり、哀しむ有は、其人はを得べければ也」

とあった。

　講演内容がどのようなものであったかを今思い起こすことはできないが、すでに先生の書に親んでいたから、先生の生きた言々句々を全身をもって受けとめることが出来たようである。そのときうたわれた讃美歌の一つに、あのチャールス・ウェスレーの有名な"Jesus, lover of my soul!"「わが魂を愛するイエスよ」があったが、

これは一般の讃美歌273 番に収録されている讃美歌です。

私の心をそのまま歌ってくれているこの歌は、涙にかすんで、しばしば声が出なかった。この歌は今も愛唱歌の一つである。

　内村鑑三全集（岩波版）第１７巻の、この日の先生の日記をひもといてみたら『今日は伝五章三節四節を講じ、自分ながらに有難た涙に咽んだ。イエスの御言葉の意味の深さに今更ながらに驚いた』としるされてある。内村先生と私のつらなりはこの日にあり、この句にあるといって過言でない。」

と。こういうふうなことが書かれてあります。それから、やがて藤井武先生との出会いがあります。

「私はその後も幾回となく先生の大集会に列席はしたが、高校時代は病弱であったので中断されることが多くあった。しかしやがし信仰的な一進展があり、東大にはいってからは健康となり、先生の高弟藤井武先生の門下となって、先生の死に至るまで無欠席でその家庭的な集会に列席した。内村先生によってまかれた種子は、この藤井先生によって根をはり、芽をふき出し幹となりつつあった。」（小池辰雄著作集第６巻『随想集』452 ～453 頁参照）

藤井武が１９３０年に亡くなられるまで、藤井先生のもとに通われたわけです。実は内村鑑三も１９３０年（昭和５年）に亡くなられた。内村先生は確か３月２６日、藤井先生は同じ年の７月１４日にお亡くなりになります。この二人の素晴らしい、先駆者といいますか、人物が１９３０年にあいついで天に帰ります。

そのあとは、塚本虎二という――これまた無教会の素晴らしい聖書学者です――その方のところへ行かれて、そこのお手伝いをされた。そんな経路をたどっておられます。

それから、職業的な面で申しますと、ドイツ文学の方の道を選ばれましたから、当然、終わりましてからも、ドイツ語の先生をなさる。終戦後は、旧制の第一高等学校の教授、そしてその後、それが教養学部に改組されます。東京大学の教養学部の教授として１９６４年、６０歳の停年までお勤めになります。停年後は、天野貞祐という――これまた大変な哲学学者ですけれども、文部大臣も２年ほどなさいましたが――その天野先生の招きで、獨協学園へ移られました。獨協大学でドイツ語、ドイツ宗教史を担当され、やがては、天野先生の懇願によりまして、獨協中学・高等学校の校長も十年間歴任されます。そのような経過をたどっておられます。

# ●キリストは無者

先生の人物というものの概略を申し上げますと、いくつかエピソード的に申し上げたいと思うんですけれども。

先生のキリスト教の非常な特色は、キリストのことを「無者」と呼ぶことです。「無者キリスト」と言われる。一体、「無者キリスト」とは何でしょうかと、普通、不思議に思うんですね。この「無」というのは――私が京都大学で聞きました講演のときにもその話が出てくるんですけれども――先生は「無」という漢字の成り立ちを調べたら、それは「天蓋の下の廿、廿の林」という。大空の下に二十、二十の林があるということ。「二十、二十の林」があるというのは、「無数の木」がある。つまり、無数の木を「無」という字が表している。即ち、無というのは虚無ではなくて、充満している。空気がこの部屋に充満しています。見えません。気づきません。けれども、充満しているんですね。

「無というのはいわゆるニヒリズムの虚無ではなくて、充満していて限定できない。たとえば、キリストのことを『愛』と言ったら、それで限定される。キリストは、愛でもあり、義でもあり、真理でもあり、生命でもあり、いろんな素晴らしいファクターを全部、内含している。無限無量である。無限無量を『無』という言葉で自分は表したい」

と。それが一つの特色です。無限無量で限定できない。無限定だから、無と言わざるをえないというのが一つ。

もう一つは、無というのは、キリストの姿を先生は見ておられて、こう言われた。

「キリスト、あんなに素晴らしいキリストが、実は神さまの前にまったく自分をナッシングに、何ものともしていない。『自分は何ものでもありません』と言って、神さまの前に完全に頭をさげている。あの素晴らしいキリストが、『自わからは何も教えることはできない。神さまが自分の中で語れと言っておられることを語っているだけだ』と仰る。いろんな奇蹟のをなさったが、あれも『神さまが自分の中でせよと仰るから、その通り動いたら、そのようになっているだけだ。自分ではない。自分は何ものも教えるものももたないし、教える言葉ももたないし、なすべき業も自わからは出ない。全部、天界の神さまから自分に流れてきて、自分の中に充満して、それが現れていくと、ああいう不思議な業となって展開する。不思議な言葉となって、人の心を打つ』と。キリスト自身がナッシングなんだ。まったく神さまの前に自分を空っぽにして投げ出しているキリストの中に、神さまが百パーセントに充満して、そして、あのように素晴らしい業となって現れた。だから、無私、私無きひと。キリストは無私なるひと、私心無きひと、自我のないひと――自我を立てない人と言った方がいいかもしれません。自我はありますよ、キリストだって人間だから。けれども、それを立てない──自分をつぶしてかかっている。そして、神の前において自分は空っぽで、です。

　『私の思いではなくて、神さま、あなたのみ思いを私を通してこの地に成らしめてください。私はあなたから遣わされてこの地上にやって来たんですから』と、それがキリストの自覚です。

　遣わされたる者、それがという自覚で、僕は主人の思いの通りに動く。それが暴君ではない。愛なる神さまです。その御方のみ旨のままに動く。だから、あのキリストの素晴らしい業がそこに展開していった。だから、私はキリストのことを『無者』と申し上げている。無者＝無限無量者。ゼロ＝無限大だ」

と言われる。

# ●人間が空っぽになる

極端と極端なんですよ。極端と極端。これは自然科学の世界でもそうらしいですね。極小の世界はまた極大の世界につながるそうです。コンピュータの集積回路はだんだん小さくなっていますね、始めは大きかったでしょ。計算機でも何でも大きかったものがだんだん小さくなります。ＩＣ回路なんていうものはどんなところにも入ってます。ああいうふうに、本当に凄いものは本当に極小になっていく。原子力だとか、核だとかいう、あの極小は我々にとっては大変困ります。あんなのは困りますけれども。

人間は、さっき申しましたように、神さまとつながっていないと、頭ばっかりが発達して、それと悪魔とが手を結ぶと、人を殺す、人類を滅亡させる。そちらに全部使われてしまう。「サリン」だってそうですね。その他さまざまのものが全部、人間を不幸にする、殺す道具に使われてしまう。素晴らしい薬品であろうと何であろうと、それを手にすれば、ほとんどすべての人を幸せにできるんでしょうけれども、それを悪魔の手下が手にいれると大変なことになる。

だから、人間というものは、本当に神さまの前に、キリストのように平伏して、

「ただただ、を成させてください」

という、そういう人にならなければ。

私は京都の琵琶湖の近くに住んでいますけれども、水源は琵琶湖なんです。琵琶湖に放射能を放り込まれたら、もう我々は水を飲めなくなってしまうんです、琵琶湖が汚染されれば。それは日本中いたる所でも言えます。この美わしい日本の国がもし変なもので汚染されて、その影響力がチェリノブイリみたいに猛烈に広がる影響力のあるものによって汚染されたら、我々は生きていけませんよね。これは脱線ですけれども。

世間のキリスト教は、「キリストは神の子だ。キリストは立派だ」と言って、当たり前みたいに、「立派だ、立派だ」と言っている。神の子だから何でもできたのは当たり前だと。先生はそうではない。

「キリストも人の子だ。人間だ。ところが、人間イエスがあのように神さまの前に徹底的に己を空しうしている。その姿にうたれた」

と仰るんですね。そして、さっきの、

「幸いなるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり」

という言葉は、「山上の垂訓」と普通は言われている。「垂訓」というのは、教えを垂れると書くので、教訓のように世間では受けとるんですね。だから、神棚にり上げたくなるわけです。「とてもできない相談だ」とか。「なに、『悲しい者が幸いだ』なんて、そんなバカなことがあるものか。笑っている者が幸いに決まっているではないか。富める者が幸いに決まっているではないか」と、そう言って、人はもう相手にしない。

けれども、先生は――あの内村鑑三も感動した「幸いだよ、心の貧しい人」とは、これは原語では「霊の貧しき人」と書いてある。霊、魂なんです――

「魂が貧しい者、これはキリストの姿だ」

ということに気づかれた。

「キリストは説教しているのではない。自分の姿を告白している。キリストは説教なんかしない。全部、神さまと自分の関わりの中で、自分の中に起こっている姿、自分の内面の姿をそのまま告白している」

と捉えたんです。。だから、あの言葉は、キリストが、

「私は神さまの前に本当に空っぽになった。そして今、空っぽになっている。そうしたら、ありがたいことに、神さまという天国が私の中に充満して、私を好きなように用いている。素晴らしいことをなさってくださる。だから、神さまの前には霊の空っぽの方がいい。自分がサムシングにならない方がいいんだ。自分は何者でもありませんと、本当に開けっ広げがいいんだよ」

と。そのように響いて来た。

ところが、さて、自分がそのようにキリストのように空っぽになれるか。これが次の問題なんですね。キリストはなられた。

# ●どん底に立たれるキリスト

よく、キリスト教会では「洗礼」と言いますでしょ。「バプテスマ」と。イエス・キリストも伝道の始めに、洗礼のヨハネという、６ヶ月先輩にあたる方からヨルダン川で洗礼を、バプテスマを受けているんです。ヨハネはパッとこれは神の子だと見えましたから、

「とんでもない、あなたは私が洗礼を授ける方ではない。私の方があなたから洗礼を授けていただくそのお方なのに、とんでもありません」

と言って、ヨハネは断るんです。ところが、イエスはその時に、

「いやいや、私にもそうしてほしい。私も普通の人間だ」

と言って、ヨルダンに身を沈めた。そして、水から上がって祈っておられた時、霊界が、天が開けて、聖霊がのごとくくだってきた。そして、

「これこそ我が喜ぶもの、わが心にかなう者」

という、天から声がきた。その「我が心の喜ぶ者」というのは、空っぽなる世界、霊の貧しい姿です。

「私は何者でもありませんと言って、神さまを百とし、自分をゼロにしている。その姿を神さまは喜んだ」

と、そう小池先生は受けとったんですね。

ところが、自分は空っぽになれない。どうしたら、自分は自我を捨て、本当に神の前に空っぽになれるのだろうか。煩悩というのは、取ろうと思っても取ろうと思っても、なお自分を支配する。

それで悩んでいたときに、あの言葉が今度は、

「幸いだよ、辰雄よ。私の十字架で既に霊貧しくされているではないか、お前は」

と、そう響いてきた。

「幸いだよ、わが十字架によって既に霊貧しくされてある辰雄よ。天国なる我、復活の我、聖霊の我、汝のうちにあり」

と、こう響いてきて、思わず全身が痺れて、畳の上にぶっ倒れたという。それくらい、それは凄い霊的体験だったという。だから、小池先生の講筵には必ずそれが出てきます。

「幸いだよ、霊の貧しき者は。天国はその人のものなり」

と。そして、

「無者＝無限無量者」

という。しかも、それは人間は無になれない。禅宗だったら、悟りで無になります。悟りで無になる。しかし、そんなことは全ての人に可能ではない。

だから、自分でどうにもできないというもの、というものを、それを実はキリストが我等に代わって全部引き受けて、十字架に掛かってくれたんだと。

キリスト教では、「罪の価は罰」なんですね。残念ながら、審きということになっている。神のにかなえば天国。神のみ教えに背くなら地獄。こういうように相場は決まっているんです、モーセのときから。

人間は「正しくありたい、正しくありたい」と一生懸命でやるんだけれども、そこに偽善というものがうまれてくる。キリストはそれを弾劾された。偽善ではだめだ、本当に内面のうるわしさ、内面の姿を神は見ておられるんだと。キリストは本当にそういう方です。ところが、人間はそうでない。

さっきの、ヨルダンで身を沈めたバプテスマを、小池先生はこのようにお話くださった。おそらく、これは先生ひとりでしょうね。キリスト教界にこんなことを言う人はいないと思います。

「ヨハネからキリストがあのバプテスマを受けたのは、まともな悔改めができない自分たちに代わって、悔改めをやってくださったんだ」

と。キリスト自身は、悔改めなんかまったく必要のない方なんです。小さいときから、神さまの懐で育ったような御方ですから。祈り深い御方でしたから。ところが、我々に代わってキリストはヨルダンに身を沈めてくれた。しかも、ヨルダン川というのは地球上で一番低い所を流れている川なんです。海抜以下の所を流れている川だそうです。そこに身を沈めるということは、一番自分がどん底に立つということ。だから、の悩みとか苦しみをまずそこで、悔改めという段階で既に身代わりになってくれている。そして、極めつけは、あの十字架の上で、

「父よ、彼らを赦したまえ。その為すところを知らざればなり」

と、自分を十字架につけたそういう者たちのために、執り成しの祈りをして、

「私の霊を御手にゆだねます」

と言って、息を引き取った。それを見守っていたローマの軍人が、

「ああ、この人こそは本当に神の人だった」

と言って、心うたれたという場面があります。

# ●みこころをなさってください

キリストは、その十字架にかかる前に、あのゲッセマネという所で本当に苦しんで祈られた。

「どうしても、このを、十字架という杯を自分は飲みほさねばならないんですか。私は今まであなたの言いつけに背いたことはありません。父のは即ち私の。あなたのご意志が私の意志。私は全部、あなたと一つになって歩んできました。そして、人々に尽くしてきました。その私があなたに捨てられて、地獄に突き落とされて、あなたの懐から引き裂かれる。これだけは勘弁していただきたい」

というのがキリストの「子」としての叫びです。「」としては従う。しかし、子として、この親子の父と子という愛を引き裂かれるのはたまりませんと。今まで離れたことがないんですから。

「だけれども、私の思いではなく、あなたのをなさってください」

と言う。

「額から落ちる汗は血のごとくであった」

と書いてあるんですね。

「天使たちが現れて、キリストを力けた」

と書いてある。それくらい、あそこで苦しまれた。でも、そこから決然と立ち上がって、十字架にかかられた。

「彼らを赦してやってください」

という、そういう死に至るまでのキリストの姿というのは凄いんです。

無私、私無き世界。それから、人に対しては愛そのもの。神さまに対しては、祈り。祈りでいつも父と一つになっている。こういうキリストです。そのキリストさまが十字架で実は、

「辰雄よ。お前の捨てられないお前の自我は、そんなものは全部私がそこで全部片づけているんだ。お前はきれいになっている。無にされているんだ。自分で無になるんじゃない。無を無条件であげるよ」

と。無というのは真空です。真空の中に何かが入ってくるんですね。我々は内側がゴタゴタしているから、入って来ようがない。どんなにおいしい御馳走も、お腹がいっぱいだったら、入ってこれません。お腹が空腹なときに、どんな素朴なお料理でもおいしいし、喉が渇ききっているときは、ま清水はおいしい。空っぽなところに本ものが入ってくる。

「十字架というものでお前さんはきれいに片づいているんだから、もう罪の問題も、良心の問題も、心の問題も悩まないでいい。そのまんまでいい。あるがまんまでいい。汚いなら汚いまんまでいい。そのままで救ってあげる。それが十字架だ」

ということに気づかれた。だから、

「幸いだよ、霊の貧しき者は。私の十字架で既に霊が貧しくされているね。だから、私というこの天国をお前にやるよ」

という。これは霊なるキリストです。霊界に行かれた霊なるキリストがおりてくる。

お釈迦さんの世界でもそうでしょ。無条件に救い給うというのが親鸞さんでしたよね。弥陀の本願には老小男女を選び給わない。善人悪人の区別をなさらない。すべての人を救い上げるというのが仏のご本願です。まだ善人の方は自分の善により頼んで、それだけマイナスがある。悪人はもうより頼むものがなくて、地獄しかないと思っているから、本当に本願の救いがありがたい。それにすがる。その心だということを親鸞は仰った。

それはキリストにおいては無条件なんです。すべての人を無条件で受け入れる。それが本当のキリストのです。残念ながら、日本のキリスト教界はそこまで徹底しているだろうか。私も初期の頃は、そういう教会に通いましたが、小池先生に出会ってからは離れましたので、それ以後のことは何とも申し上げる資格はないんですけれども。私はやっぱりそこまで徹底して仰っていただいて初めて、私のような凡夫は救われるんです。毎日、毎日、自分を吟味して、「今日はどうだった？」「はい、今日は○です」。「次はどうだった？」「今日は×です」なんて。

三打数一安打だったら、これは困りますね。やっぱり、五打数五安打であろうが、何であろうが、そんなことは関係ない。お前はお前の道を行けと。一郎選手はそういう方ですね。あの方はその日の調子に一喜一憂していない。自分の理想に向かってひたむきに進んでいましょう。私どもにひきなおすと、

「お前はあるがままでいい。お前のことはもうこだわる必要はない。私が全部引き受けた。その代わり無心の境地でひたむきに、なすべことをせよ」

と、そういうふうに響いてくる。

# ●敬天愛人

そこから、次に教育者としての先生というところへ移りますと、先生は十年間、獨協中学・高校の校長をなさって、そのときに教育の理念として三つの柱を立てられた。それは何かと言いますと、まずは、「敬天愛人」。西郷南洲の言葉です。

天を敬い人を愛する。これが大事なんです。人間は己が宇宙の主人公になったらダメだと。人間を超えた偉大なる実在者――神さま、仏さま――その前にこうべを垂れる。天を敬う。これが人間の魂の姿として大切だということです。これが根底だと、さきほども、宗教心がなければ本当の文化は育たないということを申し上げましたね。教育においてもそうだと。

まず親が、先生が、そういった育てる立場にある者が敬天愛人を実践していて初めて、本当の子どもが育っていく。みんな子どもというのは大人を見て育つものですから。大人がダメなら、子どもに立派になれと言ったって、これは無理な話ですね、心の姿としまして。能力のあるなしの問題ではないんです。人間としてです。

人間として、人間はみんな神の子、仏の子なんですから。人間はみんなそれぞれ才能は違います。しかし、人間としてはみんな尊い存在です。その尊い存在は、天を敬う、あるいは天からその存在をたまわっている。そういう人間存在を粗末にあつかってはいけない。その代わり、その人間存在は、自分たちをこの世に生かしめてくれている天なる神さま、仏さま、そういう神仏に対して畏敬の念、敬う心――信者であれば、信ずる心になりますが――それを持つ。そこでつながりを持たないといけない。それがあって、今度は横に向かっては人を愛する。これが生まれてくる。

もともと、「宗教」「レリジョン」という言葉は、ラテン語で「レリギオ」という語からきている。「レ」とは「再び」という意味で、「リギオ」というのは「リガーレ」「結ぶ」という言葉から来ている。何に結ぶかというと、神さまと結ぶんです。自分たち人間存在というものと神さまとを結ぶ。人間というのは本来、結ばれていた存在なんです。それがいつしか忘れてしまった。もう一度、幼き日の追憶に帰りなさいと。生まれる以前の結ばれていた、そういう追憶の世界に帰りなさいという、「再び結び返す」というのが「宗教」の本当の意味なんです。結び返しです。

それから、先生はこんなことも言われましたよ。「大言海」という辞書で、「ひと」という語を引いたら――この愛蔵書センターにも「大言海」が並んでいましたけれども――あの「ひと」というところをご覧下さいませ。語源として、こういうふうに書いてある。「」、「霊がまる」と書いてあります。「ひと」の語源は「霊が止まる」ということから来ている。つまり、人間存在というのは神霊、神の霊が止まる、そういう存在だという。神霊を宿すもの、神霊が止まっている存在、これが「ひと」の起源なんです。だから、それが止まっていなければ、「ひと」でないんですね。どこかへぬけてしまったら、もう一度結び返して止まってもらわないといけないわけです。

そういうことで、この「宗教」というさっきの「レリギオ」という言葉と、「ひと」の語源である「」、これまた不思議につながっていることになります。

先生は非常に漢字というものを大事にされました。さっきの「無」という字もそうですし、その他いろんな漢字の語源とかを調べて、「素晴らしい、素晴らしい」といつも言っておられました。これもその一つですね。「霊が止まる」これを「ひと」という。

# ●天賦天職

それから二番目は、「天職」。この「天賦天職」ということがまた極めて大事なことです。特に日本におきましては。と言いますのは、さっき申しましたように、人間存在はみんな平等なんです。障害で生まれた子も、どの子もみんな人間存在として尊い存在なんです。薬物で障害をきたしたお子さんは気の毒ですけれども、しかし、この世で生をうけている以上は、すべてが非常に尊い存在なんです。それから、五体満足な方だってそうですね。みんな尊い存在なんです。

ところが、それぞれ人間というのは、持ち味がちがいます。才能がちがいます。スポーツの素晴らしくできる子、数学がもの凄くできる子、音楽が凄く素晴らしい子、絵を書かせたら凄い子。いろんなのがいるわけですね。そのいろんなものは、これは全部、天から授かっている天賦、天から授かったこれまた才能である。神さまは人間を画一的につくらない。

ちょうど、ここにあります素晴らしい花がそれぞれどの花も素晴らしい。バラも素晴らしいし、スミレも素晴らしいし、それぞれが素晴らしい。それが大調和をなしているのが、自然界の素晴らしさです。

そのように人間も、それぞれの人がそれぞれ隠れた素晴らしい才能をたまわっている。それを本当に目覚めさせて、引き上げて伸ばして、花咲かせるのが教育です。そういう教育でなければいけない。ところが、一律に試験で五教科七科目とかね、とにかくおしなべて画一的に――最低限なものは必要でしょうけれども――画一的にそういうテストで能力を測って、それで人間の序列が決まる。

これはまったく、人間というものをひとつの型に押し込んで殺す道なんですね。なぜ、型にはめるかというと、出世したいから。出世するには、いい官庁に入り、いい企業に入り、なんとかかんとかと、みな「いい、いい、いい」というのが全部付きますね。「お父ちゃんは学歴がなかったから苦労した。お前には学校に行かせてやりたい」なんて言って、無理やりに学校にやらす。善意であっても、子どもには迷惑至極なんですね。やはり、子どものもっている本当の才能を生かしてやる。そのためには親が犠牲になってもいいんだよという親ならば、子どもは素晴らしく育つと思うんです。

それを第二番目に、「敬天愛人」の次に「天賦天職」と言われた。人間はそれぞれ、天から授かった才能がある。それの自覚ができたときに、今度はそれを生涯貫きなさい。金が儲かるからこの仕事をするとか、この仕事は金が儲からんからやらんとか。そうじゃなくて、今は儲からなくても、自分はこれが天賦だから、それを天職と自覚してそれに突き進む。そういう気魄、心構え、これが大事だということを淳々と説かれた。

どれだけの父兄がそれに賛同したかわかりません。「受験、受験」の時代でしたからね。「ああ、また小池校長は理想的なことを言っているわ。校長は頭がいいから、勝手なことを言えるけれども、うちの子は……」なんて思っていたかもしれない。けれども、今はまさにそうでしょ。

オリンピックが華やかでしたけれども、オリンピックで活躍した選手なんていうのは、やっぱりあれでよかったんじゃないでしょうか。勉強させて学者になれるかといったら、それはなれたかも知れませんよ。けれども、好きな道に行かせてやる。「好きこそものの上手なれ」と言いますものね。その代わり、「自己責任だよと。やるのはお前だ。経済的な面では面倒みてあげるけれども、成功するかせんかはお前の努力次第だよ」と。こういうかたちで励ましてやる。

また、そういう子はまたいい指導者に恵まれたり、いい先生についたりして、何か道が開けていく。さっきの、"Where there is a will, there is a way."「精神一到何事か成らざらん」「天は自ら助くる者を助く」という諺もあります。だからやっぱり、ひたむきにやる人には、何かしらそれを助けようという、天の何か作用が働くのではないかと思うんです。私は何もクリスチャンだけではないと思う。とにかく、ひたむきに一つのものに突き進んでいる人を天は放っておきはしない。

# ●光の世界へ

私は、我々はこうやって地上に生きていますけれども、この世を去ったときには全部、天界にいるんだと思っています。仏教の方も、キリストの教の方も、どんな方も全部、天界に、霊界に行く。そこで自分の子どもたちとか、自分に縁のある者たちを守っていると思うんですよ。祈って助けていると思う。それで天使になって、「がんばれよ、がんばれよ」なんて言って、励まし役をさせられているんだと思う。向こうは結構忙しいと聞いてます（笑）。

というのは、悪い霊もいるものですからね。闇の霊がいる。地獄へ、暗闇へ引きずり下ろそうとする霊と、光の霊とが戦っているそうです、向こうの世界では。だから、へんてこな霊にとっつかれたら、本当に、とっつかれた人の責任というよりも、とっついたやつに振り回されて不幸な結末を招くということのようです。私は霊界を見てきたわけではないけれども、いろんな本を読んだり、いろんな方のお話を聞いたりすると、どうもそうらしい。丹波哲郎なんていうのは、「大霊界」なんていう本を書いてますけれども。丹波哲郎さんという俳優さんも素晴らしいけれども、なにも丹波哲郎さんによらずとも、本当に向こうの世界は厳然としてあります。

だから、日本人は、お彼岸になれば、ご先祖を大事にする。お盆になれば、京都だって、送り火をたくとか、いろいろそういう行事をしてますのは、あれは決して根拠なくやっているのではなくて、長い年月の間にそういうものが築かれてきて、それなりにそれぞれの意味があると、私は思っているんです。だから、それを私は大事にしたいと思っています。

「クリスチャンだから、あなたも、こうやって死になさい」と言われたら、

「私はキリスト様がいらっしゃるから、キリスト様が私を助けてくださるから、それでいいんですよ。むしろ、私はご先祖をキリスト様によってお守りくださいとお祈りしているんですよ。もちろん、そういう仏さまも助けてくださればありがたいお話です」

と。向こうの世界は全然、喧嘩なんかするはずがありませんよ、そんなものは。

大体、自我のある人間は向こうへ行けない。自我のある人間は長いこと向こうで修養せんならんそうですよ、途中の世界でね。先輩方に助けられて、それでだんだん、光の世界に入っていくそうなんです。つまり、自我のある人というのは非常に暗いんです。我々は暗闇からお陽さまのところにいくと、目がクラクラとしますね。目がだんだん開かれていって、やっとものを見ることができる。でも、太陽は見られません。だから、太陽はガラスをススで黒く焼いて、それで太陽を、日食とか月食とか見たでしょ。

そのように、本当にこちらが光そのものでないと、光そのものと対することができないそうなんです。だから、向こうの世界に行きますと、始めはかすかな光です。それでも、光にあこがれて来た人はすっと行くそうです。闇が好きな人は闇の方へ行くそうです。自分で選ぶそうなんですよ、人間はどこまでも。この地上で闇の世界ばかりしか知らない人は、光の世界が嫌なんです。「闇の親分たちがお迎えに参りました」と言うと、「よおー、よく来てくれた」と、そっちへ行くそうなんですよ。

ところが、光の世界を憧れる人は、地上では「キリスト」の「キ」の字も知らなくても、光の子たちが来ると、「これぞ、私が求めていた世界でした。あなたはどなたですか」と言う。それで向こうの世界へ行く。そういうまことに向こうの世界というのは、不思議でありながら、合理的な世界です。つまりまったく不平等がない。この世で金儲けばかりやっていた人は、その世界になかなかスーッと入れなくて、しばらくそこで修養するそうなんです。だんだん心が清くされていくと、だんだんと高いところへ上っていくと、こういうことです。だから、

「心の清き者は幸いなり、その人は神を見る」

と、ちゃんと書かれています。それはキリストの告白なんですからね。

そんなことで、さっきの天賦天職の話に戻りますけれども、そのように、ひきたむきにやっている者を天は助けていく。親もそのことを信じる。親もそのことを信じて、本当に天の心で子どもさんを育てる。「お前のとりえは何や？」、「いや、わからんのや」。「じゃ、わかるように一緒にさがそうね」、「そんなことをしたら、もう年齢的にまにあいません」。「間に合わなくたっていいよ。人生は長いんだ」。

大体、「１５歳になったらこれをせんならん、２０歳になったらこうせんならん」なんて、それがいかんのですよね。やっぱり、遅咲きのバラもあれば、早咲きの桜もあるんですから。その子その子の成長の度合に即して、そして花開くように、社会もそういうあったかい目で見ないといけないと思うんです。

それを、「天賦天職」という言葉で、みごとに表しています、教育理念としましてね。

# ●自律自彊

それから三つ目。「自律」といいまして、自分が自分を律する。それから自分を鍛える。事を成さんとする者は、志を立てたら必ず自分を鍛えぬいていかないとダメなんです。安易な道なんかどこにもありません。「学問に王道なし」と申しますように、どの道もそうですよね。

スポーツの選手たちだって、本当に大変な努力をしてます。しかし、その努力が苦痛ではないようですよ。目標があるから。楽しみがある。努力する、自分で自分を鍛えること自身の中に喜びを見いだしていく。甲子園の野球の高校生も同じでしょうね。そういった、自分がどろんこになりながら、くたくたになりながら、それでもなお私はこれをやらざるを得ないという、そういうものと結びつくときに、その子は成長していくんです。

ですから、敬天愛人を基本とし、天賦天職の自覚をもって、そして、目標に向かってまっしぐらに進むという、そのためには自分で自分を律する、生活を正しくする。遅刻なんかしないとか、そういうようなかたちで自分を鍛えるということが大事なんです。

自分で律し、そして自分を鍛えていく。これが獨協中学・高校の教育理念だという。素晴らしい理念だと思います。

まぁ、それにひきかえ、現代の社会というのは、どうしてもゲームがありますし、自分の部屋にこもってゲームやったりとか、テレビを見て夜遅くなったりとか。いろいろそういうことで、非常に教育環境は、文化的文明が進むにつれて、ある意味では、自分で自分を鍛えるという意味からは悪くなりますね。乗り物だってすぐ自動車に乗ったりとか――私は自転車で通勤してますけれども――やっぱり、身体をある程度、若い時に鍛えないといけない。

農業の方は麦踏みということをやりますね。私の子どもの頃は、自分の周りが畑だったんで、霜が降りるような所は麦を踏んで、それをみんなつきあって、そして、麦が実るという。麦踏みのころは、空にはヒバリが囀っていました。私はマラソンをやってまして、夜明けにこそっりと自分でそういう所を走っていたんですよ。明るい所を走るのが恥ずかしいからね。ああ、素晴らしいなぁ、春は素晴らしいなぁと。ヒバリがさえずり、向こうから太陽が昇ってくる。麦畑には霜が降りていて、麦踏みをしている。素晴らしいなぁと思ったことがあります。

# ●専門はゲーテ

これが先生の教育理念ということでありました。それから、学者としての小池辰雄ということになりますと。これはごく簡単にいたしますけれども、先生はいうまでもなくドイツ文学の権威者ですね。好きなんです。本当に好きなんですね。大体、本が好きです。さっきも申しましたように、すべてが本に変わってしまうほど本が好きです。それから、すごく丹念ですね。コツコツコツコツと一つのことをなさる。ある時は、二年くらい、ベルジャエフ、ベルジャエフでしたよ。とにかく打ち込む方でしたね。

専門はドイツ文学、ゲーテです。ゲーテが好きなんです。小池先生のキリスト教の恩師である藤井武先生という方は非常に潔癖な方で、「ゲーテは警戒しろ」と。「なぜですか」、「たくさん恋人おったから」というわけですね。ゲーテにとっては、魂の遍歴の過程においてたくさんの女性、五、六人は現れてますね。だから、「あんなのはキリスト教の観点からしてよくないから、ゲーテには近づくな」と仰ったらしいけれども、先生はゲーテに打ち込んだ。

それはどういう点かといいますと、ゲーテという方は当時のキリスト教界の中にはまらなかった。当時のキリスト教という狭い枠を突き抜けた、本当に自然の子だった。ゲーテは何を愛したかというと、まず神さまなんです。神さまの前に無条件に――「神さま」といっても、それは神さまを現している「キリスト」です――

「このキリストという方の前には私は無条件に頭を下げる」

と、ちゃんと晩年に告白しているんです。キリストにおいて神の光が現れている。

ゲーテは光の子といわれる。ちょうど太陽が中天にさしかかった１２時頃に、オギャーと生まれたといわれている。光の子だと。神さまの光がキリストにおいて輝いている。だから、キリストの前にを垂れると言う。

それから、大自然です。大自然は神さまの創られたものである。大自然の中で最も素晴らしいものは太陽だ。太陽こそは自然の光です。太陽がなかったら、これは真っ暗です。ゲーテは太陽を凄く愛した。

それからもうひとつ。人間世界における自然はというと、女性なんです。女性においてその自然の光が現れているという。女性を性の対象としてとか、そんな見方ではない。女性というものの中に神秘なるものを見た。女性ご自身はどういうふうに自分をご覧になっているかは知れないけれども、男性の目から見てる話ですけれども、女性というものの中に非常に神秘なるものを見たんですね。それで幾人かの女性に出会うと──その幾人かの女性はそれぞれに個性がちがう──出会う女性、出会う女性によってゲーテの魂は非常に変化し、進化していくそうです。私はその後の女性の運命が気になってしょうがないんですけれどもね。しかし、それはそれぞれが独立の人格だから、それでいいのでしょう、ということにしておきたいですけれども。とにかく、女性における神秘なるものが自分を変革していく。だから、ゲーテの『ファウスト』という凄い詩があるんですが、その最後が、

「永遠に女性的なるものが

我らを引きて行かしむ」

という句がある。それで、小池先生はそのあとへ、更にソネットを二行付け加えた。

「愛と喜びをもって

聖なる太陽へ」

と。「聖なる太陽」とは即ちキリストです。先生は、

「天界でゲーテはきっと喜んでいるだろう」

と言う。そういう方なんです。

# ●太陽はキリストの愛の血

ですから、先生がゲーテに打ち込んだというのは、ゲーテのハートに共鳴したんです。ゲーテと自分が一つみたいな気持で、ゲーテの心を心とする。それを論文で表している。だから、ああいう論文というのはないですね、日本の学者の中には。

たしかに、日本の学者の論文は、「ドイツのゲーテ研究の第一人者の誰それはこれについてはこう語っている。これについてはこう語っている。故にこうである。しかし私はこう思う」とか、なにかそういう比較的な評論みたいなのが大体、文学というゲーテ研究というもののようだと私は思うんです。

だが、先生はそんなのはおかまいなしで、自分がゲーテになりきって、ゲーテの心を心とする。それには、ゲーテは深く聖書を読んでいたから。聖書を深く読んで、ゲーテの心にならないとゲーテはわからないと仰る。

ところが、日本のゲーテ研究家は聖書を読まない。西洋文学をやる人で聖書をあまり読まないでやる人が多いですから。それはまぁ、勝手ですけれども。先生は果たしてゲーテの学者たちからどう評価されたかは知りませんけれども、私のような素人からみたら、これは本ものだなというふうに思います。

今、太陽のお話をしましたけれども、また、先生は太陽が好きなんですね。だから、祝日、祭日にはたえず日の丸の旗を掲げました。

「これは太陽を表しているんだから。太陽はキリストの血である。キリストの血で我々は真っ白にしてもらった。それもこれも全部きれいにしてもらった。太陽はキリストの愛の血。それが太陽だ。そして、それで真っ白にされた白地。これはキリスト信者の角度からみたら素晴らしいものだ」

と言って、旗を掲げておられた。そういう心を受けとらなければ、「なんだあれは右翼ではないか」なんて誤解されたりすることがありますけれども。そういう太陽に対する非常な憧れ、憧憬がありました。

それから、こういうことも仰っていました。

「地球というものは太陽の存在なくしてあり得ない。地球というものは太陽の引力によってひっ張り回されて、太陽の回りをグルグル回っている。もしも、太陽がなかったならば、地球というものは存在しえない。太陽から熱をいただく。光をいただく」

と。自然の作物もすべては太陽の恵みで育っていくわけですね。だから、冷夏となりますと、作物が育たない。オゾン層が破壊されますと、紫外線によって我々の皮膚がやられたりします。もとはそうではなかった。本当に太陽というのは恵みそのものであって、地球をしてあらしめている。地球という存在そのものが太陽でもって成り立っている。しかも、太陽は地球に対して何も求めない。与える一方ですね。

だから、私の子どもの頃にもよく太陽に向かって拝んでいるご年輩の方がありましたが、私はそれは素晴らしいことだと思うんです。

「太陽さま、ありがとう。あなたのお陰で我々はこうやって生きているんです」

という、その敬虔なる思いを忘れたら、「太陽は化学的な物質か」なんて、そんなことだったら、これは大変ですよね。

そういうことで、太陽というものの素晴らしさ。そして、それがまた、先生においては神さまにまたつながるんです。神さまというのはそういう方だと言う。

# ●在りて在らしめる者

旧約聖書の中にモーゼというイスラエルの偉大な指導者がいました。そのモーゼに神さまが呼びかけた。モーゼはそのときはミデアンの田舎で羊飼いをしながら、幸せな結婚生活を送っていたんです。８０歳のモーゼに神さまは現れた。

「モーゼ、モーゼよ」

「はい。あなたはどなたですか」

と。かくかくしかじかのものだと。

「お前は、イスラエルの民を、エジプトで苦しんでいる民を救い出せ」

と。「十戒」の映画にありますようなあの場面ですね。

「いえいえ、もう私は年寄っているし、第一、イスラエルで私は受け入れられなかったから、ここへ亡命して来たんです。今さら」

「いやいや、お前をつかわす」

「ところで、あなたのお前は何でしょうか。何と説明したらいいのでしょうか」

と言ったら、

「我は在りて在るものなり」

と神さまは言われた。「我は在るもの」だけでなくて、「在りて在るもの」と重ねて、「在りて在るもの」と言う。私はそれを、本当の実在者と――我々は在っても消えていく。神さまは在りて在り続ける。ただ「在りて在るもの」と、私はこう思ったんですよね。我々はただ在るだけのものでまた消えるもの。しかし、神さまは在りて在り続けるものと思った。

ところが、小池先生は太陽を見ていたとき、ハタと気がついた。

「在りて在らしめる者」

と。「在る」という存在が他者を在らしめる。他者を生命づける。これが神さまだと。神さまの本質というのは、自分が永遠の実在者として存在して、「ああいい気分だ」と言っているようなものではない。他の生きとし生けるものすべてに生命を与え、それを生かす。在る者が即、他者を在らしめる。これが神さまの本当の姿であるということに気づいた。文法的にもヘブライ語ではそれが可能だそうです。普通の学者はその説をとりませんけれども、小池先生は、

「自分は、そのヘブライ語の『我は在りて在るもの』というのを、『我は在らしめて在るもの』あるいは『我は在りて在らしめるもの』と、そういうふうに読み取りたい」

ということを宣言された。

そういう読み方というのは、私は素晴らしいと思うんですね。ものごとを一つ一つ見てなくても、それを常に一番深い根源の世界、神さまの世界とのつながりの中でものを見る。そういう見方です。これは、宇宙的な把握でなければ、それは出てこないと思います。自分が何かに囚われていたら出てこないと思う。

明日のことを思い煩ったり、仕事のことを思い煩ったり、家族のことを思い煩って、絶えず何かの思い煩いの中に――私はかつてそこにいたから、キリストに救いを求めたんですけれども――何かに絶えず気にかかって囚われて、下を見たり横をみたりやってますと、そういう世界が開けない。

いつも魂がこの地上を突き抜けて、天の世界にあって、それからこの地上のことを見てますときに初めて心にゆとりが、潤いが、すべてを包もうという、そういう豊かさが現れてくる。人に対して優しくなれる。心配している人を励ますことができる。そういう存在になる。先生というのはそういう存在でありました。

# ●『無の神学』

それからもう一つ、学者としての先生はやっぱり、キリスト教学の方でも独自の神学を開かれた方です。ルター研究者の佐藤繁彦という先生の『ローマ書に現れたるルターの根本思想』という――これは京都大学で哲学の学位をとられた学位論文なんですけれども――それを読んで大変感動されました。高校時代にその先生の講演を聞かれたそうですけれども、数年後にその著作を見て、とても感動して、それから、神学という――神さまに関する学問です――それに目覚めて、コツコツとその道をわけいってこられました。そして、小池辰雄著作集の第３巻『無の神学』という本を出されました。

ちなみに、第１巻は『無者キリスト』と言いまして、ここに持ってきてますが、こういう装丁のもので、これは初めは著作集の第１巻として出されましたが、装丁を新たにして、小池信雄さんが勤めておられた河出書房新社からお出しになったものです。これも本当に素晴らしい本です。そこにももう既に神学に関する若干の論文が収められているけれども、本格的には第３巻の『無の神学』というところに小池神学が告白されています。先生はそういった、神学者としても独自の地歩を築かれたと思います。

# ●『霊界の星々』

それから、詩人としての小池辰雄。これも、先生は「自分は詩人だ」と仰るんです。

「自分は伝道者であり、学者であるよりも、実は本質は詩人なんだ」

と仰る。ゲーテの『ファウスト』というのは詩なんです。凄い詩です。だから、先生は『ファウスト』に匹敵するような詩をつくりたかったらしいんです。文学の世界ではなくて、キリストの世界で。それを晩年の自分の悲願としておられました。百歳くらいまでかかってそれを仕上げたいという、そういう思いをたえずもらしておられたんですけれども、未完成で終わりました。先生の短歌とか詩とかは、著作集第８巻の『詩歌集』という一冊の本に収められております。

そういうふうに非常に詩を愛し、自分でも詩をつくり、自分でも讃美歌を書いたりなさっていますが、ここに持ってきましたのは、『霊界の星々』という本です。これは先生が亡くなられたあとから、先生から預かっている遺稿をもとにして出版された。まだ充分推敲もされてないような段階のものも、中にはあるんですけれども。それが全部、詩のかたちで、自分の生い立ちから、いろんな人物の伝記のようなものが全部、詩のかたちで告白されているものがこの『霊界の星々』です。

これはおもしろいですよ。どういう人物が詩のかたちで描かれているかといいますと、第一篇は「生い立ち」という自分のことなんです。第二篇は、幕末維新の烈士。佐久間象山、吉田松陰、西郷隆盛、勝海舟、坂本龍馬、この五人が取り上げられています。

それから第三篇は教育者。これのトップに上がっているのは、新島襄。私は新島襄のこの詩をつい最近これを読んだんです、この講演のために。感動しましたね。私は最高裁を終わってから、同志社大学に勤めたんです。これも何か天の導きだなと思いました。

新島襄がいかに烈々たる思いで同志社を立ち上げたか。脱藩して、国禁を犯してアメリカへ渡って、そこでいろいろ勉強し――当時向こうには本当に素晴らしいピューリタンの愛に溢れた人たちがいた――そういう方々──先生とか、宿を貸してくれた家庭の方とか──そういうご恩のおかげで非常に素晴らしいアメリカ滞在生活を８年くらい送る。そして、最後のお別れの演説をする。

「自分は日本に帰ったら、そういった教育をしたい。学校を建てたい」

と。そうしたらもう、たちまち寄付金が集まったそうなんですよ。そういうお話もでてきます。それで京都へ帰って、同志社を建てるんですけれども、京都は仏教の大本でしょ。仏教の牙城へキリスト教で乗り込んでいくんだから、これまた大変なんですよ。それはもう暗殺されてもいいくらいのことをやってのけたわけです。

そういう捨身の精神で立ち上げられたのが同志社大学だということを思いますと、私が同志社に行ったということは何かこれは不思議なことだなと、そんなふうに思います、余談ですけれども。

それから次に、天野貞祐。そして、佐々木吉三郎。これは小池先生の小学校のときの校長先生です。小学校５、６年生のときに、この校長先生の修身のお話が――今でいう道徳です――素晴らしかったそうです。そこで、その佐々木吉三郎先生が亡くなられてから、もう先生が９０近い歳になっていましたが、小学校へ訪ねていかれた。

「実は、佐々木吉三郎先生のことが未だに忘れられないので、その先生が書き残されたものがないですか」と。図書室に案内された。残っていたものがあった。それを読んでまた感動した。

ちょうど小池先生の１歳年上と１歳年下にその校長先生の令嬢姉妹の女子生徒があった。その１年後輩の令嬢が生存しているというので、その方に連絡をとって、かくかくしかじかということで、再会を喜んだという。そんな話を聞いておりますけれども。そういう佐々木吉三郎の話があります。

昔は、小学校の先生、校長先生の中に素晴らしい人がいたんですね。やはり、子どもの頃は感受性が強いですから、いい先生に巡り合うと、もの凄くいい影響を受けますし、ひどい先生だと、本当に心が傷つきます。だからやはり、一番大事なのは幼稚園、小学校、その先生方です。そこで魂の教育が出来てしまいます。それからあとでは、いくらそれを直そうと思っても、もう大学にきてからなんて、なかなか大変なんです。

それから、第四篇、芸術家では詩人として、ダンテがあがっている。『神曲』を書いたダンテですね。先生はダンテとゲーテが大好きです。

それから、第五篇に宗教家。第一章は仏教の方で、最澄、空海、法然、親鸞、榮西、道元、日蓮、一遍、一休、良寛それから白隠。こういう方々のことをずっと詩のかたちで歌われています。非常な敬愛の心をもって書かれています。

それから、キリスト教にいきますと、アッシジのフランチェスコ、聖書の人ルター、それから内村鑑三、藤井武、賀川豊彦。こういう人物が出てきます。

それからちょっととばして、芸能人では、チャップリンが出てくる。チャップリン、マリリン・モンロー、松井須磨子、中山晋平それから美空ひばり。こういう芸能人が出てきます。

だから、先生が人を見る目というのはちょっと普通の人とは違う角度から、道徳的な方とは違う角度から、それぞれの人の本質、天賦なるもの、それをいかに生かしているか。いかに自分を投げ出して、一つの道に打ち込んでいるかを見る。チャップリンなんかもそうですものね。

# ●そっくりそのまま受け入れる

素晴らしいものを素晴らしいと素直に讃美できる。これがまた大事なことなんです。キリスト教を信仰したら、とかくキリスト教以外のものについてはケチをつけたりとかね、狭量なことが多いんです。それが日本における本当のキリスト教の善きものを拡げていく、どれだけ大きな壁になっているかということを私はしみじみと感じます。もっともっと広やかであってほしい。

それはどの宗教でもいえます。およそ「宗教」という枠を超えて、本当のものをお互いに尊ぼうと。それが我々を養ってくれ、この人間社会に平和をもたらすんだからと。物質界、この地上のゴタゴタしたどうしようもない世界からの救い、それを突き抜けたところからもう一度この地上に、そして、地上を救いへと担い上げていこうじゃないかと。縁の下の力持ちになろうじゃないかという、これが本当の宗教だと思うんですね。

人間の力ではできない。だから、神仏という人間を超えた方のお力にすがろうと言う。また、神仏は、無私の心で尽くす人間は、助ける。だから、そういう人たちの出現を待っているはずなんです。

そういった全人格的な角度で、私は今日は、人間小池、あるいは教育者としての小池とか、芸術家として、あるいは学者としての小池、宗教人としての小池というように、いろいろ角度を変えて申しましたけれども、本当に一つなんです。一つの人が多彩なかたちで現れているだけだと、そう思います。だから、人間というのは、「あの人はこんな人だ」と決めつけるのは、また人間に対する冒瀆なんですね。人間にはいろんな面がある。いろんな面をそのままそっくり受けいれる。それが大事なことではないかということを、先生との長いお付き合いをとおして感じました。

# ●自由人

詩人としての小池から、最後は宗教人としての小池。それが私の本題なんですけれども、もう時間もありませんし、今までのお話の中にずいぶん出てますから、そんなにたくさん申し上げないでおこうと思います。

先生という方は本当の自由人でした。本当の自由というものは、自分というものから、囚われから、解き放たれるところに成り立つものだという。

「本当に自わから、囚われから解き放たれる、その自由。束縛からの自由です。これは外的な束縛だけではない。自分自身という束縛からも解き放たれる。自己が完全に解き放たれている。大空に羽ばたかされる。そのときに初めて今度は、人への愛、愛への自由として展開する。自分のことできゅうきゅうとしているあいだは、とても『人を愛せよ』なんて言われたってできない。本当に自分が解決されて初めて、安心して人に優しく接し、人を助け上げることができる。束縛からの自由、解放というのはまだ消極的な面で、本当の自由は人へ、愛への自由という行動面に現れてこなければいけない」

と。そういうことを仰っておりました。それから、

「祈りというものはお願いごとではないんだよ」

と言われました。先生にとってはキリストです。キリストという霊的人格、それも活ける実在、その霊的人格に自分を投げ入れる、預け入れる。そこで一つにしていただく。あちらがこちらを包んで、

「お前と私は一つだよ。私はお前と一つだよ。大丈夫だよ」

と。向こうから自分に迫り、自分をそういう霊的な存在へとたえず新たに変えてくださるのだ。これは絶対無条件の恵みだ。人間の側に根拠があるのではない。神さまの愛――仏教でいえば仏さまの本願愛――その力が我々を支え、我々を正しい道へと導いて行ってくれる。それに対する帰依。だから、自分はナッシングだ。自分は何ものでもないと、そういう淡々たる境地で生きておられました。

そういうことが、私どもにとっては、非常な何か天からの大きな教えと申しますか――「お前たちはこのように歩いていけば大丈夫だよ」という――そういう励ましをたえずたえず我々はいただいているような気がいたしております。

本日は、先生からいえば生誕百年でありますし、この小国町にとっては愛蔵書センター開設一周年という記念すべき時でございますが、こういうふうにして、その蔵書を受け入れていただいたその蔵書の本体であった小池辰雄はどんな人だったのかということを、私が先生に接した経験、先生の著作を通して学んだこと、そんなものの中から取り出して、お話し申し上げた次第です。では、これで終わりといたします。どうも、ご静聴ありがとうございます。（拍手）

# ●（会場からの質問）

武蔵野市との交流事業として、小池辰雄先生について大変わかりやすく聞かせていただきましてありがとうございました。特に私が感動したのは、「南無キリスト」という一言で、小池先生の精神に触れたような気がしまして、大変に感動しているところでございます。

私が聞かせていただきたいのは、先生のお話とはまったく関係のないことで恐縮なんでありますが、キリスト教の教典にバイブルがありますね。世界中の言葉に訳されて読まれている。そして実質的な、古今東西を通じて、世界一のベストセラーだと聞いておるわけです。文学的にも著名な人がそれこそ何百年にもわたって世界に出てきましたけれども、その中で、宗教書のバイブルは量的にも世界一のベストセラーとおそらくかわらんだろうと言われていることを聞いたことがあります。それは一体、本当なんでしょうか。あるいは、先生のお立場からみて、それをどのようにコメントされますか。それをちょっとお聞かせ願いたいと思います。

（**奥田**）諸外国でどうかということは、私は存じあげませんですけれども。キリスト教国だったら、聖書はベストセラーになっても当然だと思います。それ以外の国でもベストセラーになるということはとても嬉しいことです。ただ、日本に関して申しますと、ベストセラーといいながら、いや果たして本当にどこまで深く読まれているんだろうかと。そこの点なんですね、私が問題にしたいのは。売られているということと、本当に読み込むということとは別ですものね。特に小池先生は、

「聖書をせよ。体で読め。日蓮は法華経を体で読めと言った。日蓮においては法華経は体にしみついているから、龍ノ口で斬られそうになったけれども、斬ろうとした奴の腕がしびれて斬られなかったという。そのくらいに日蓮においては法華経というのは体にしみついていた。我々が――特にキリスト教信者ですが――聖書を読むときに、決して上っ面で読むな。本当に聖書の奥深くまでわけいって読め。で読め、身読せよ。聖書研究はたくさんされているけれども、身読している人は果たしてどれだけいるか」

としょっちゅう言っておられた。私は同感なんです。だから、文学の好きな方も聖書を読んだり、山上の垂訓とか、いろいろキリストの言葉を読まれたりする。それはそれなりの役割はあるんだろうけれども、本当にキリストの心を心とする、そこまで読んでいただいているだろうか。

私は、旧約聖書は、これはイスラエルが中心ですから、それについてまでは申しません。少なくとも、新約聖書という――非常に薄っぺらいもんですよね――新約聖書に関しては、もっともっと読んでほしいなと思う。

読むについては、躓きが多いんですよ。さっき申しましたように、「教え」として読んでしまう。「命令」で読む。「『汝の敵を愛せよ』、そんなもんできません」と、こうなんですね。これは私は今日話せなかったけれども、小池先生はこう仰った。キリストの言葉で一番凄いのは、

「汝ら、天の父のきごとく、全かれ」

という言葉です。

つまり、普通の人は、いい人には善くする。憎む奴には、「この野郎！」とこうやる。でも、

「天の父は、善き者にも悪しき者にも太陽を昇らせ、き者にも直からざる者にも雨を降らせたもう。そのようにお前たちも天の父の全きごとく全かれ――完全であられるごとく、完全であれ――」

ということは、愛において完全であれという、そういう一つの命令なんです。それを、「できっこありませんよ」というのが我々なんです。それを小池先生はどう言うかというと、

「私のところに来なさい。キリストに自分を預けなさい。そうしたら、私（キリスト）がそのように、愛せるようにしてあげる。力をあげるよ」

と。全部、そういうふうにひっくり返して読む。そういう読み方をあまりキリスト教の人は教えてくれないと思う。だから、

「『何々すべし、すべからず』ではない。そうなるよ。私がそうさしてあげるよ」

と。例えば、モーゼの十誡で、

「殺すべからず」

と書いてある。あれは、

「お前は殺人なんかしっこない。何となれば、私がお前の神ではないか」

と、ちゃんとレビ記にはそう書いてある。

「我は主なり」

と書いてある。

「私がお前たちをエジプトから力ある手で引っ張りだして救い上げた主ではないか。その私の民であるお前たちが殺人なんかしっこないよね。そうだろう」

という、そういう愛の信頼の呼びかけの言葉だと。それを「殺してはいけない」、「殺すな」「盗むな」という、「すべし、すべからず」だったら、反逆の心が出てくる。そうではなく、

「お前はそんなことはあり得ない。私の子ではないか」

と信頼している。

だから、さっきの「人を憎むな」というのも、憎むのは人間性として当然なんです。でも、

「人を憎めないような心に私がつくり変えてあげるから、私に依存しなさい」

という、すべてキリストが責任をもってくださる。「なになにせよ」と書いてあるのも、全部裏で、

「私のところに来れば、私がそうさせて上げるから、安心して私のところへいらっしゃい」

と読む。そうなれば躓かないんですけれども。

例えば、日本で亀井勝一郎という著名な思想家がいました。あの方は若いときはキリスト教だったんですけれども、キリスト教ではもうやり切れなくって、親鸞の方へ行ったんです。私は、亀井勝一郎さんが小池先生に出会っていたら、親鸞の所へ行かなくても済んだと思っているんです。多くの日本の文学者たちがみんな躓いて、そこから離れていくのは、「山上の垂訓」とか、そういった教訓として受けとって、そして、それをまともにやろうと思ったら、偽善者になるんですね。そこで嫌だからといって逃げて行ったのではなかろうかというふうに推測します。

まぁ、ご質問にお答えできたかどうかはわからないけれども、やはりベストセラーであることは嬉しいけれども、もう一つ深い読みをしてほしい。そのためには、『無者キリスト』なんかをぜひ読んでほしいと、そう思っているんです。